



Title	清華簡（五）所収文献解題
Author(s)	中国出土文献研究会
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 58-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

清華簡（五）所収文献解題

中国出土文献研究会

二〇一五年四月、『清華大学藏戦国竹簡』第五分冊が刊行された。そこに収録された文献とそれぞれの整理者（説明・釈文・注釈作成者）は、以下の通りである。整理者はいずれも、清華大学出土文献研究与保護中心のメンバーである。

- ・『厚父』……………趙平安
- ・『封許之命』……………李学勤
- ・『命訓』……………劉国忠
- ・『湯處於湯丘』……………沈建華
- ・『湯在啻門』……………李守奎
- ・『殷高宗問於三壽』……………李均明

我々研究会が本書を入手し、解読を始めたのは、同年

五月であった。その後、七月四日・五日に大阪大学で清華簡（五）に関する最初の研究会を開催し、各文献の初歩的な検討を行った。そして、九月七日には、清華大学に赴き、清華簡を実見調査するとともに、整理者の方々と研究討論をする機会に恵まれた。これまで、出土文献の整理者は、我々にとって遙かに遠い存在であったが、今回、各整理者と直接対面し、約二時間にわたって濃密な質疑応答ができたのは、きわめて有意義なことであった。そこで、こうした経緯も踏まえて、清華簡（五）所収文献の解題を作成し、以下に掲げる。

作業は分担で行い、形制一覧表を清水洋子、『厚父』を福田哲之、『封許之命』を草野友子、『命訓』を中村未来、『湯處於湯丘』を福田一也、『湯在啻門』を竹田健二、『殷高宗問於三壽』を湯浅邦弘が担当した。

解題の凡例は以下の通りである。

- ・各文献の解題は、(1) 書誌情報、(2) 整理者「説明」、(3) 補足・考察、(4) 参考文献、からなる。
- ・(1) の書誌情報は、原則として、整理者「説明」と公開された図版および「竹簡信息表」に基づき、その要点を記す。また、竹簡の形制が視覚的に理解しやすいように図を作成して掲載する。整理者「説明」には、各編痕間の長さが明示されていないので、これについては、竹簡の図版(原寸大)に基づき、その数値を掲載する。

- ・(2) の整理者「説明」は、原則、整理者の「説明」(中国語)の内、主として内容に関わる部分について担当者が日本語で紹介する。なお、整理者が当該文献の内容についてあまり言及していない場合は、次の(3)で担当者が補足説明する。
- ・(3) の補足・考察は、整理者が説明していない点を担当者が補足し、また、担当者自身の現時点における考察を記す。

- ・(4) の参考文献は、雑誌に収録されたものとインターネットで公開されたものとに大別し、それぞれ発表順に記載する。ネット掲載分については、逐一UR

Lは付けないが、それらが掲載されている主なサイトおよびそのURLは次の通りである。

- ・清華大学出土文献研究与保護中心
<http://www.tsinghua.edu.cn/publish/ceitp/>
- ・武漢大学簡帛研究中心簡帛網
<http://www.bsm.org.cn/>
- ・復旦大学出土文献与古文字研究中心
<http://www.gwz.fudan.edu.cn/>

清華簡 (五) 形制一覽

文献名	竹簡数	簡長 (完整簡)	編痕	簡端	編号 (背面)	文字数	篇 題	備 考
厚父	13簡	約44cm	三道	平齊	有	459字	「厚父」 (第13簡背面)	<ul style="list-style-type: none"> もともと全9簡であったが、第1簡と第4簡が欠失しているため、現存するのは7簡である。
封許之命	7簡 (現存)	約44cm	三道	平齊	有	200字	「封許之命」 (第9簡背面)	<ul style="list-style-type: none"> 内容が「逸周書」命訓篇とおおよそ合致することから、「命訓」と仮称された。
命訓	15簡	約49cm	三道	平齊	無	605字		<ul style="list-style-type: none"> 内容が「逸周書」命訓篇とおおよそ合致することから、「命訓」と仮称された。
湯處於湯丘	19簡	約44.4cm	三道	平齊	無	564字		<ul style="list-style-type: none"> 篇題は、第1簡冒頭の五字（「湯處於湯丘」）からつけられた仮称である。 「湯在菅門」と形制や字跡が一致しており、同一人によって書写されたものと考えられている。
湯在菅門	21簡	約44.5cm	三道	平齊	無	586字		<ul style="list-style-type: none"> 篇題は、第1簡に見える字句（「湯在菅門」）からつけられた仮称である。 「湯處於湯丘」と形制や字跡が一致しており、同一人によって書写されたものと考えられている。
殷高宗問於三壽	27簡 (現存)	約45cm	三道	平齊	有	766字	「殷高宗問於三壽」 (第28簡背面)	<ul style="list-style-type: none"> もともと全28簡であったが、第3簡が欠失しているため、現存するのは27簡である。 編号に乱れがあり、「十五」と「十」はそれぞれ第10簡と第15簡の位置にあるべきである。整理者による釈文は、すでに入れ替えて記載している。

【注】本表は、整理者「説明」と公開された図版、および「竹簡信息表」をもとに作成した。

・「文字数」について、竹簡の写真図版で少しでも文字の痕跡が見える場合は、一文字として数えている。

(清水洋子)

『厚父』(こうふ)

(1) 書誌情報

整理者は趙平安氏。竹簡は全十三簡。第一簡の上部に四字分、下部におよそ十字分の欠失があるが、他の竹簡は完存する。第十三簡の本文末尾には墨方点が付されており、本篇はここで完結したと見られる。簡長は第一簡が二十四・七cm、第二簡～第十三簡がおよそ四十四cm幅〇・六cm。三道編。満写簡は三十三字～四十一字。竹簡(完簡)の形状を图示すれば、次のようになる。



竹簡の背面には順序を示す編号が付され、第一簡の欠失部にあたる「一」を除く「二」から「十三」の番号が確認される。ただし、松鼠(李松儒)氏(簡帛論壇「清华簡『厚父』初読」二十七楼・二〇一五年四月十七日)が指摘するように、第十一簡背面の番号は「廿一」とあり、誤写と見なされる。最後の第十三簡の背面には、篇題と見られる「厚父」の二字が別筆で記されている。

(2) 整理者「説明」

『厚父』は「王」と厚父との対話からなる。「王」はまづ夏代の歴史に溯り、「永く夏邑(邦)を保つ」条件として、政に勤めること、人を用いること、天命を敬畏すること、祭祀に対して慎み深くすることの重要性を指摘し、厚父は逆の面から、君主が典刑を用いず、その徳を顛覆し、非彝に沉湎すれば、臣はその徳を慎まず、「用て在服を叙せ」ざる深刻な結果となることを明らかにする。続いて「王」は自分の即時の行ないを紹介し、厚父はそれに対する応答の中で自分の認識と理念を述べ、その重点は、天命を畏れること、民心を知ること、すぐれた司民と民との関係を処理すること、酒を戒めることなどであるとする。全文はわずか数百字(残存四百五十九字)であるが、内容は豊富で、文辞は典雅、哲理に富み、多方面にわたり重要な研究価値をもつ。

篇中の一部の本文は『孟子』梁惠王下篇に「書曰」として引かれた文章と類似しており、趙岐はそれに注して「書、尚書の逸篇なり」と述べている。孟子の引用文と本篇の構成・文辞の特色などを結びつけて総合的に考慮すれば、『厚父』は『尚書』の逸篇と見なされる。

(3) 補足・考察

『厚父』は用語や文体、さらに『孟子』引『書』との共通性などから、『尚書』に類する文献と見なされている。『厚父』における最大の問題は、本篇の時代(言い替えば厚父と問答する「王」の王朝)について、夏・商・周の三説が提起されていることである。このような状況が生じた原因として、本文中にその時代を特定するための直接的な手がかりが得られないことが挙げられる。例えば『厚父』中の固有名詞を見ると、時代不明の「厚父」を除けば、以下のようにすべて夏王朝にかかわる人物や国名で占められている。

「禹」・「夏邦」・「啓」・「皋繇」(以上、第一簡)、「夏邑」(第二簡)、「夏之哲王」(第三簡)、「先哲王孔甲」(第六簡)

しかし、これらはすべて「王」と厚父とが夏王朝の歴史について問答した前半部分に見え、時代を特定するための直接的な根拠とはならない。

こうした中で注目されるのが、『孟子』引『書』との関係から『厚父』の時代を特定しようとする李学勤氏の見解である(李学勤「清華簡《厚父》与《孟子》引《書》」)。以下では、『厚父』の時代にかかわる有力な説の一つであるこの李氏の見解を紹介し、あわせて若干の

考察を加えてみたい。

上述のように『厚父』には、『孟子』梁惠王下篇に「書曰」として引用される文章と類似する本文が認められる。当該本文は、『厚父』では夏王朝の諸王の政事について質問した「王」の最初の問いかけに対する厚父の回答のはじめの部分に見える。一方、『孟子』では斉の宣王がみずからの勇を好む欠点について問うたのに対し、孟子が『詩』・『書』を引いてそれぞれ周の文王・武王の勇のあり方を示し、小勇ではなく大勇をもつべきことを説いた部分に見え、『厚父』と類似する『書』の引文は、周の武王の勇について述べた箇所にあたる。行論の便宜上、以下に『厚父』および『孟子』の当該本文(傍線部)を前後の部分も含めて掲げておこう。

○『厚父』簡四―簡六

厚父拜手稽首曰、「者魯、天子、古天降下民、設萬邦、作之君、作之師、惟曰、其助上帝亂下民。之之 憲王之 廼竭失其命、弗用先哲王孔甲之典刑、顛覆厥德、沉湎于非彝、天廼弗赦、廼墜厥命、亡厥邦。
……」

(厚父拜手稽首して曰く、「者魯あ、天子、古天、下民を降し、万邦を設け、之が君を作り、之が師を

作り、惟れ曰く、其れ上帝を助けて下民を乱めよと。之の慝王 迺ち其れ命を竭失し、先哲王 孔甲の典刑を用いず、厥の徳を顛覆し、非彝に沉湎す。天迺ち赦さず、迺ち厥の命を墜とし、厥の邦を亡ぼす。……」

○『孟子』梁惠王下篇

(孟子) 對曰、「……詩云、王赫斯怒、爰整其旅、以遏徂莒、以篤周祜、以對于天下。此文王之勇也。文王一怒、而安天下之民。書曰、天降下民、作之君、作之師、惟曰、其助上帝寵之。四方有罪無罪、惟我在。天下曷敢有越厥志。一人衡行於天下、武王恥之。此武王之勇也。而武王亦一怒、而安天下之民。……」

(孟子) 对えて曰く、「……詩に云う、王赫として斯に怒り、爰に其の旅を整え、以て莒に徂くを遏め、以て周の祜を篤くし、以て天下に對う」と。此れ文王の勇なり。文王一たび怒りて、而して天下の民を安んぜり。書に曰く、天、下民を降し、之が君を作り、之が師を作り、惟れ曰く、其れ上帝を助けて之を寵せよと。四方の罪有るも罪無きも惟だ我在り。天下曷ぞ敢えて厥の志を越すもの有らん

や」と。一人、天下に衡行するは武王之を恥ず。此れ武王の勇なり。而して武王も亦た一たび怒りて、天下の民を安んぜり。……」

李学勤氏は、両者の共通性に注目して『孟子』が引用した『書』を『厚父』の伝本のひとつと見なし、その前掲から、『厚父』中の「王」は孟子が述べるとおり周の武王であり、本篇は商書ではなく周書であるとの結論を導く。また程浩氏も李学勤氏とほぼ同様の論拠を示した上で、文辞の面でも周初の文献の用語と共通する点が多いことを指摘し、『厚父』は、周の武王が克殷建国後に夏朝の遺民である厚父を訪問し、前文人の明德について教えを請うたものであらうと推測している(程浩「清华簡《厚父》周書説」)。

なお、整理者の趙平安氏は、文章の形式・内容・語句と用語からみて『厚父』は『尚書』に類する文献であり、『孟子』引『書』に該当する可能性が極めて高いとしながら、同時に当該の文章が常語に類する性格をもつことから、『孟子』が依拠したのは『厚父』とは異なる『尚書』の篇章であった可能性もあると述べる(趙平安「《厚父》的性質及其蘊含的夏代历史文化」)。また前項(2)に記したように、趙氏は整理者「説明」において

も、『孟子』引『書』との類似性を、『厚父』を『尚書』の逸篇と見なす傍証にとどめ、両者の関係については敢えて踏み込まず、断定を保留しているようである。この点について、九月七日の清華大学出土文献研究与保護中心における質疑応答の際に、趙氏に質問したところ、現在では『孟子』引『書』を『厚父』の伝本のひとつと見なす立場である、との回答を得た。

それでは前掲の引用にもとづき、あらためて周書説の論拠である『厚父』と『孟子』引『書』との関係について見てみよう。まず前半部分（傍線部）を比較すると、『厚父』の「古天降下民、設萬邦、作之君、作之師、惟曰、其助上帝亂下民」は『孟子』引文の「天降下民、作之君、作之師、惟曰、其助上帝寵之」とよく対応し、両者はほぼ同じ本文と見てよいであろう。ところがそれに続く後半部分（波線部）は、『厚父』の「之慝王廼竭失其命、弗用先哲王孔甲之典刑、顛覆厥德、沉湎于非彝、天廼弗救、廼墜厥命、亡厥邦」に対して、『孟子』引『書』は「四方有罪無罪惟我在、天下曷敢有越厥志」に作り、両者には顕著な相違が認められる。

李学勤氏はこうした両者の相違を伝本の異同によるものとし、清華簡『尹誥』と『礼記』緇衣篇所引『尹誥』との間にも、類似の状況が認められるとする。しかし清

華簡『尹誥』と『礼記』緇衣篇との異同については、馬楠氏によって両者の本文に明瞭な対応関係の存することが指摘されており（馬楠「清華簡第一冊補釈」、『中国史研究』二〇一一年第一期）、李氏が竹簡には見えないとする句についても、流伝の間における本文転訛の過程を具体的に想定することができる。これに対して『厚父』と『孟子』引『書』との後半部分に、そのような本文転訛の過程を想定することは恐らく困難であり、清華簡『尹誥』の場合と同列に論ずることはできない。しかも『孟子』引『書』の「四方有罪無罪惟我在、天下曷敢有越厥志」の二句は「一人衡行於天下、武王恥之」という孟子の発言の直接的な拠り所となる部分であり、果たしてそのような議論の根幹にかかわる本文の有無を、伝本の異同として処理し得るか否かについても、なお慎重な検討を要するであろう。

そこで前半と後半との文章の展開に注目すると、『厚父』の前半「古天降下民、設萬邦、作之君、作之師、惟曰、其助上帝亂下民」と後半「之慝王廼竭失其命、弗用先哲王孔甲之典刑、顛覆厥德、沉湎于非彝、天廼弗救、廼墜厥命、亡厥邦」とは、「このような天（上帝）の意思に反し、愚かな王はその命を失い……」という逆接の関係にあるのに対し、『孟子』引『書』の前半「天降下

民、作之君、作之師、惟曰、其助上帝寵之」と後半「四方有罪無罪惟我在、天下曷敢有越厥志」とは、「このよ
うな天（上帝）の意思に従い、四方の賞罰はすべて自分
がその任にあたる……」という順接の関係にあり、両者
は正反対の方向性を示す。しかも『厚父』の該当箇所は
「王」ではなく厚父の發言中に見えるのに対して、『孟
子』引『書』中の「我」は周の武王を指し、引文の話者
は武王と見なされることから、話者という点においても
両者の状況は大きく異なっている。

これらの諸点を踏まえれば、「四方有罪無罪惟我在、
天下曷敢有越厥志」の二句の有無を伝本の異同と解する
ことはおそらく困難であり、両者は前半において類似し
た本文を共有しながら、後半はまったく異なる展開をも
つ別個の文章と見るのが妥当であろう。

したがって、仮に孟子が『厚父』の伝本の一つに依拠
したとすれば、それは本文の前半部分のみであって、後
半は前段の『詩』にもとづく文王の勇との対応をはかる
ために、別の『書』篇から取り入れたか、あるいはみず
から本文を作為したかのいずれかと思なざるを得ない。
さらに別の可能性として、孟子が依拠した周の武王
にかかわる『書』篇が『厚父』とは別個に存在してお
り、両者に共通する前半の本文は、いずれか一方が他方

を参考にした、との状況も考慮されるのではないだろう
か。

以上の考察からもうかがわれるように、『厚父』に關
する検討は、戦国期における『尚書』の実態解明と緊密
に結び付いている。『厚父』の資料的意義は、まさにこ
の点に見いだすことができよう。

(4) 参考文献

(雑誌)

- ・程浩「清華簡《厚父》、周書の說」(『出土文献』第五
輯、二〇一四年十月、中西書局)
- ・趙平安「《厚父》の性質及其蘊含的夏代歴史文化」
(『文物』二〇一四年第十二期)
- ・趙平安「談談戰国文字中值得注意的一些現象——以清
華簡《厚父》為例」(『出土文献与古文字研究』第六輯
(上)、二〇一五年二月)
- ・馬楠「清華簡第五冊補積六則」、『出土文献』(第六輯)
(中西書局、二〇一五年四月)
- ・李学勤「清華簡《厚父》与《孟子》引《書》」(『深圳
大学学报』二〇一五年第三期(五月))
- ・鵬宇「清華大学藏戰国竹簡(伍)《文字訓积三則》」
(『管子学刊』二〇一五年第二期(六月))

(ネット)

・清華大学出土文献讀書会「清華簡第五冊整理報告補正」(清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年四月八日)

・陳偉「讀《清華竹簡(伍)》札記(三則)」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十一日)

・曹方向「讀清華簡《厚父》短札」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十一日)

・何有祖「讀《清華大學藏戰國竹簡(五)》札記」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十二日)

・華東師範大學中文系出土文献研究工作室「讀《清華大學藏戰國竹簡(伍)》書後(一)」(武漢大學簡帛網、二〇一五年四月十二日)

・黃國輝「清華簡《厚父》補釈」(復旦大學出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月二十七日)

・子居「清華簡《厚父》解析」(清華大學出土文献研究与保護中心、二〇一五年四月二十八日)

・王寧「清華簡五《厚父》之《厚父》考」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月三十日)

・郭永秉「簡說清華簡《厚父》篇應屬《夏書》而非《周書》」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年五月六日)

・寧鎮疆「說清華簡《厚父》“天降下民”句的關聯文獻問題」(清華大學出土文献研究与保護中心、二〇一五年五月二十五日)

・王坤鵬「簡論清華簡《厚父》的相關問題(二)」(復旦大學出土文献与古文字研究中心、二〇一五年七月二十六日)

・吳琳「清華簡(伍)《厚父》篇集釈」(復旦大學出土文献与古文字研究中心、二〇一五年七月二十六日)

(福田哲之)

『封許之命』(ほうぎょしめい)

(1) 書誌情報

整理者は李学勤氏。竹簡数はもともと全九簡であったが、現存は七簡。完簡が一簡、整簡が二簡、残簡が四簡。完簡の簡長は約四十四cm、幅は〇・六五cm。簡端は平斉、三道編。満写簡は三十一〜三十四字。竹簡(完簡)の形状を图示すれば、次のようになる。



竹簡の背面には順序を示す番号がある。それによると、第一簡と第四簡が欠失している。第三簡・第七簡・第八簡・第九簡は上端がやや欠損しており、第三簡は冒頭一字の上部が欠損、第七簡は冒頭一字の右半分が欠損、第八簡・第九簡は文字の欠損は見られない。最終簡である第九簡には墨鉤があり、以下は留白になっている。第九簡背面の下部には篇題「封許之命」が記されており、その下には墨点がある。

(2) 整理者「説明」

「命」とはもともと「書」の一つの形式であり、伝世の「書序」の中には「肆命」「原命」「説命」「旅巢命」「微子之命」「賄肅慎之命」「畢命」「罔命」「蔡仲之命」「文侯之命」などの名が挙がっているが、今の『尚書』の中には「文侯之命」一篇があるのみである。清華簡の中には『説命（傳説之命）』三篇（第三分冊所収）があり、『説命（傳説之命）』と『封許之命』は「命」の性質と様相を理解するための一助となる。

『封許之命』は、周初の許国封建に関する文献である。許国の封建は、過去の学者は周の武王の時と見なしていたが、簡文を見ると、はじめて許に封ぜられた君主呂丁がかつて補佐した文王・武王について、すべて諡号が用

いられており、分封が成王の世であることを証明している。さらに、成王親政後、間もない頃である可能性がある。そうでなければ呂丁がかなり高齢であることになる。呂丁は姜姓の呂氏であり、『説文解字』叙では呂叔と称しており、齊に封ぜられた太公望呂尚（清華簡「晝夜」（第一分冊所収）では「呂上父」に作る）と関係があると考えられる。

簡文には許に封ぜられた際の恩賞について詳しく記されており、圭・鬯・路車ちやうなどは関連する典籍および青銅器の銘文と対照することができる。このほか、簡文には呂丁が封国に赴く際に寄贈された礼器「薦彝」（組を成す祭器）についても詳しく書かれている。多くの器物の名称は解釈を定めるのが難しく、発掘された当時の遺物と対照させて、さらに研究を進める必要がある。

(3) 補足・考察

・本篇には以下のような内容が記載されている。

- ① 周の文王の時の呂丁の功績。呂丁が文王を補佐し、明刑を司り、はかりごと謀を治め、上帝に事えたことなどを述べる。

- ② 武王の時の呂丁の功績。呂丁が武王による殷討伐を補佐したことなどを述べる。

③これらの功績が認められ、呂丁が許国に封ぜられたこと、そして、そこで自らの謀を至らせ、王家を憂い、四方を治め、周王（成王）のそばに仕えずに（周王朝の内部からではなく外部から）周王を助けたいことを述べる。

④周王から呂丁に授けられた車馬や器物などについて述べる。

⑤封許のことは、周王から呂丁に向けられた戒めのことばで、慎んで謀を行い、永く周国を厚くし、周王の命を廢することがなければ、国を長く保つてゆけると述べる。

本篇の大部分の内容は、西周・春秋時代の青銅器の銘文によく見られる冊命の形式と同様である。冊命はもともと竹簡に書写されていたものと考えられるが、現在、竹簡に書写された西周・春秋時代の冊命は発見されておらず、非常に珍しい例である。青銅器の銘文や『尚書』の「周書」部分などと照らし合わせると、欠失している第一簡（約三十字）には、時間・場所・人物に関する説明（西周時代の銘文によく見られる形式の例としては、「唯〇年△月干支、王在（場所）、（誰が誰に冊命を授けたか）」など）があった可能性が考えられる。また、本篇と『尚書』文侯之命とは冊命の

形式と内容が似通っており、本篇は「命」の体裁を窺い知る上できわめて重要な資料である。

簡文には、「大命を膺受し、駿として四方を尹す」（第二簡）、「汝呂丁、肇め文王を右け、棼みて厥の烈を光んにし、明刑を□司し、厥の猷を釐め、祇みて上帝に事う。桓桓として丕いに敬い、敬びて天命に將う。」（第二簡・第三簡。□は欠字）とあり、前者は周王が大命を受けて四方を正したことを示している。周知のとおり、「大命」「天命」「上帝」は青銅器の銘文や『書』『詩』などによく見られる語である。

本篇には、周王から呂丁に授けられた車馬や器物などが詳細に記録されている。その際、まず、周王が呂丁に蒼珪（青い玉器）、柎鬯一亩（黒黍と香草で作った酒一壺）、路車（天子・諸侯の乗る車）、馬四匹、および衣裳や車馬に付ける装飾品などの器物を「易（賜）」う（下賜する）と述べられている。さらに、「薦彝」すなわち龍鬻・璉・鐘・鉦・盤・鑑・釜・簋・觥などの青銅器を「贈」と記載している。本篇においては、車馬や宝玉・装飾品などの器物には「易（賜）」字、青銅器には「贈」字が使用され、明確な使い分けがなされているようである。特に、西周時代の冊命に

関する銘文の中に「贈」字が使用されている例はきわめて少なく、「易(賜)」と「贈」の区別について今後さらに検討を加える必要がある。

(4) 参考文献

(ネット)

- ・ 清华大学出土文献读书会「清华简第五册整理报告补充」(清华大学出土文献研究与保护中心、二〇一五年四月八日)
- ・ 鹏宇「《清华大学藏战国竹简(伍)》零识」(清华大学出土文献研究与保护中心、二〇一五年四月十日)
- ・ 程燕「清华五剖记」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十日)
- ・ 石小力「清华简(伍)《封许之命》所载“朱旃”考」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十二日)
- ・ 石小力「清华简(伍)《封许之命》“鉤·膺”补说」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十二日)
- ・ 何有祖「读《清华大学藏战国竹简(五)》札记」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十二日)
- ・ 华东师范大学中文系出土文献研究工作室「读《清华大学藏战国竹简(伍)》书后(一)」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十二日)
- ・ 付强「《封许之命》推測兩則」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十二日)
- ・ 付强「《封许之命》与史牆盤的“允尹”」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十四日)
- ・ 付强「《封许之命》与青铜监的自名」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十四日)
- ・ 陳劍「《清华简(伍)》与旧说互証兩則」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月十四日)
- ・ 付强「读清华简(五) 剖记一則」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十七日)
- ・ 吳雪飛「清华简(五)《封许之命》“戚章爾慮”句詁」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年四月十七日)
- ・ 蘇建洲「《封许之命》研說札记(一)」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月十八日)
- ・ 孟蓬生「积清华简《封许之命》的“象”字——兼論“象”字的古韻歸部」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月二十一日)
- ・ 王挺斌「利用清华简来解积《诗经·鲁颂·閟宫》“三寿作朋”」(武汉大学简帛研究中心简帛网、二〇一五年

四月二十三日)

・王寧「読《封許之命》散札」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月二十八日)

・王寧「再説《封許之命》的『呂丁』与《世俘》的『呂他』」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年五月二十一日)

・侯建科「清華簡五《封許之命》篇集釈」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年七月三日)

・子居「清華簡《封許之命》解析」(清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年七月十六日)

・金字祥「《清華五・封許之命》『𠄎』字芻議」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年八月五日)

(草野友子)

『命訓』(めいくん)

(1) 書誌情報

整理者は劉国忠氏。竹簡は全十五簡。三道編。全篇を通じて程度は異なるものの、欠損箇所が見られる。特に、第一・二・三・七・九・十二・十四・十五簡については、文字も僅かに(一)三文字分)欠失している。完簡を復元すると、長さは約四十九cm。竹簡(完簡)の形

状を図示すれば、次のようになる。



最終簡(第十五簡)を除いて、全ての竹簡の背面竹節部に順序を示す編号が記されているが、現時点において、「四」と「十四」の番号については、竹簡の欠損により確認できない。篇題は見えず、その内容が『逸周書』命訓篇とおおよそ合致することから、本篇は命訓篇の戦国期の写本とみなされ、「命訓」と仮称されている。

(2) 整理者「説明」

本篇は、現行本『逸周書』命訓篇とおおよそ合致する内容である。

『逸周書』は歴史上、長期にわたり埋もれ、善本もなかったことから、多くの誤字や脱字が見られ、テキスト解釈上、深刻な状況にあった。すでに刊行されている清華簡『皇門』や『祭公之顧命(祭公)』などの諸篇も、現行本『逸周書』皇門篇や祭公篇とほぼ合致する文献であり、現行本『逸周書』との校勘に重要な役割を果たしている。命訓篇についても同様に、竹簡本と対照させる

ことで、現行本に多くの誤りがあったことを認識できる。そのため、本篇は我々が命訓篇の原本を復元する上で、有力な手がかりとなると予想される。

清華簡『命訓』の発見は、『逸周書』中の多くの文献の成立時期を判断する上でも重要な意義を有する。「命訓」は『逸周書』中、二番目に配された篇で、『逸周書』周書序には命訓篇について、「殷人 教えを作すも、民極を知らず、將に道を明らかにし極（中村注・劉師培は「極」字を衍字であろうとしている。（黄懷信等撰『逸周書彙校集注』）以て其の俗を移さんとす。『命訓』を作す」と記されており、周の文王が為したものと考えられていたことが分かる。しかし、多くの学者たちは本篇の成立をより遅い時期とみなし、甚だしきに至っては、漢代になってようやく世に現れたとしている。だが近年、この認識は変わりつつある。すでにある学者は、『逸周書』の冒頭三篇、「命訓」と「度訓」「常訓」はみな「訓」が篇名に見え、また為政・牧民の道を述べており、性質や内容に一貫性がある。そのため、これら三篇は深く関連する、まさに同一時期の文献であろうと指摘している。この他、武称・大匡・程典・小開等の篇も「命訓」と同一組に属する文献と考えられ、その特徴として、数字を用いて排比（中村注・順に配列する修辭法

の一つ。例えば、本篇では「天道三（中略）天有命、有福、有禍。」というような用法を指す）している点が挙げられる。『左伝』や『戦国策』には、これらの組に属する文献が多く引用されているため、ある学者はこれが春秋時代にはすでに成立していたと主張している。このように、清華簡『命訓』の発見は、『逸周書』中、命訓篇と関連の深い文献を検討する上でも大いに役立つものと考えられる。

（3）補足・考察

○書誌情報について

・ 図版と「竹簡信息表」とを参照すれば、本篇の完簡には、一簡あたり三十九〜四十六字程度記されていたと推定される。

・ 本篇には符号が多用されている（墨鈎（レ）が十六、墨釘（一）が十二、重文記号（三）が五十一見える）が、第六簡「夫天レ道三」のように、墨鈎で区切ると明らかに文意が通じない箇所もあるため、注意が必要である。

○内容について

・ 本篇は二部に大別することができると考えられる。まず、前半部は冒頭「□（天）民を生じて大命を成

す。司徳に命じて、正すに禍福を以てせしめ、明王を立てて以て之に訓えて曰く……」(第一簡)から「……是の故に明王は此の六者を奉じて、以て万民を牧い、民用いて失せず」(第十一簡)までで、ここには主に、次の二点について記述されている。

①大命小命・福祿・禍過・恥・生穀・死喪の六つをうまく人民に施せば、政治は適切に行われる。

②天道には三つの方策(命・福・禍)があり、人道にも三つの方策(恥・市冕・斧鉞)があるが、天道と人道の三つはそれぞれに対応しており(命⇨恥・福⇨市冕・禍⇨斧鉞)、その根本は究極的には同一のものである。ただし、極命・極福・極禍・極恥・極賞・極罰(※ここでは「極」は過度の意)は政治を危うくさせるものであるため、明王は、この六者を慎重に行い、万民を牧う必要がある。

このように、本篇前半部には天道と人道とを密接に結びつけて為政を説く、天人相関の思想が見える。

一方、本篇後半部は「之を撫するに恵を以てし、之を和するに均を以てし……」(第十一簡)から、最終簡「微あらば以て始を知り、始あらば以て終を知る」(第十五簡)までで、主に人民統治に必要な十二の項目(恵・均・哀・樂・礼・芸・政・事・賞・罰・中・

権)について、それぞれ用いるべき場面と用いてはならない場面とを列挙している。

・全篇を通して、清華簡『命訓』と現行本『逸周書』命訓篇とは、語句の相違が散見する。その中で最も注目すべきは、次の「命」に関する記述であろう。(※74・75頁に掲げた「清華簡『命訓』と現行本『逸周書』命訓篇の対照表」の網掛け部分を参照。)

I. (現行本『逸周書』命訓篇)

明王、是故昭命以命之、曰「大命世罰、小命罰身」。

(竹簡本清華簡『命訓』)

天、故昭命以命之、曰「大命世罰、小命命身」。現行本では、「大命世罰」以下の言葉の発言者が「明王」と記されているのに対して、竹簡本では「天」と記述されていることが分かる。天は人の行動如何によつて禍福を降す存在として伝世文献中に頻出するが、管見の限り、直接言を発する存在として描かれることはない。そのため、竹簡本中のこの天の発言は、やや異質なもの感じられる。

この点について、筆者は本年九月七日、清華大学を訪問した際に、整理者の劉国忠氏に直接お伺いする機会を得た。その際、劉氏は「清華本に見える「天曰く」の記述は、天が直接言葉を発しているのではな

く、明王の言が天の言に仮託されて記述されているのである」という見解を示された。確かに劉氏の指摘する通り、明王の統治論が天に仮託されて述べられている可能性は十分に考えられる。

「命」に関する記述は、該当箇所その他、命訓篇冒頭にも次のように見える。

II. (現行本『逸周書』命訓篇)

天、生民而成大命。命司德正之以禍福。

立明王以順之、曰「大命有常、小命日成」。

(竹簡本清华簡『命訓』)

□(天?) 生民而成大命。命司德正 以禍福、

立明王以訓之、曰「大命有常、小命日成」。

冒頭句における「大命有常」以下の言葉の発言者については、竹簡本では残欠のため不明であるが、現行本では「天」と記述されていることが分かる。劉氏は、この冒頭句も含め、明王を立てるのは天であり、それゆえ明王の言は天の言を反映しているという考えを述べられたのであろうと思われる。

ただし、命訓篇中では、「夫天道三、人道三。天有命、有福、有禍。人有恥、有市冕、有斧鉞。」(清华簡『命訓』)とあるように、「命」は「天道」に属するものとみなされていたことが窺える。そのため、「命」

に関する「天」の言を直ちに「王」の言と捉えることには、なお慎重な検討が必要であらうと感ずる。

本篇に見える天の教訓、Iの「曰「大命世罰、小命命身」」、およびIIの「曰「大命有常、小命日成」」の語句は、構造上も対をなすものであり、もともとどちらも天に関連付けられて説かれた成句的表現であったように思われる。そのため、Iに見える「大命世罰」の発言者が現行本と竹簡本とで異なる点については、はじめ竹簡本のように、為政の根本理念として「天」(あるいは天道)と深く関連付けられて説かれていた該当句が、後にテキストに混乱が生じて、現行本のように「明王」の言として書き換えられた可能性があるのではないかと推察される。

最後に、竹簡本と現行本との比較の便を図るため、対照表を掲載する。

なお、対照表中の□は竹簡の残欠により欠失した一文字分の空白を表している。また、両文献の使用語句に相違がある場合には該当箇所を波線を、竹簡本・現行本のどちらか一方のみ見える語句には二重傍線を、両文献の語順が転倒している場合には点線を附した。現行本『逸周書』命訓篇のテキストには、黄懷信等撰『逸周書彙校集注』(上海古籍出版社、一九九五

年十二月)を用いている。

清華簡『命訓』と現行本『逸周書』命訓篇の対照表

清華簡『命訓』

現行本『逸周書』命訓篇

□生民而成大命。命司德、正以禍福、立明王以訓之、曰「大命有常、小命日成」。日成則敬、有常則廣、廣以敬命、則度居而重義、則度至于極。或司不義而降之禍、禍過在人、人無懲乎。若懲而悔過、則度至于極。夫民生而恥不明、上以明之、能無恥乎。如有恥而恆行、則度至于極。夫民生而樂生穀、上以穀之、能母勸乎。如勸以忠信、則度至于極。夫民生而痛死喪、上以畏之、能母恐乎。如恐而承教、則度至于極。

六極既達、九間俱塞。達道道天以正人。正人莫如有極、道天莫如無極。道天有極則不威、不威則不昭、正人無極則不信、不信則不行。夫明王昭天信人以度功、功地以利之、使信人畏天、則度至于極。

夫天道三、人道三。天有命、有福、有禍、人有恥、有市冕、有斧鉞。以人之恥當天之命、以其市冕當天之福、以其斧鉞當天之禍。□方三述、其極一、弗知則不行。

極命則民墮、乃曠命以代其上、殆於亂矣。極福則民祿、

天生民而成大命。命司德正之、以禍福。立明王以順之、曰「大命有常、小命日成」。成則敬、有常則廣。廣以敬命、則度至于極。夫司德司義、而賜之福祿。福祿在人、能無懲乎。若懲而悔過、則度至于極。夫或司不義、而降之禍、在人、能無懲乎。若懲而悔過、則度至于極。夫民生而醜不明、無以明之、能無醜乎。若有醜而競行不醜、則度至于極。夫民生而樂生、無以穀之、能無勸乎。若勸之以忠、則度至于極。夫民生而惡死、無以畏之、能無恐乎。若恐而承教、則度至于極。

六極既通、六間具塞。通道道天以正人。正人莫如有極、道天莫如無極。道天有極則不威、不威則不昭、正人無極則不信、不信則不行。明王昭天信人以度、功地以利之、使信人畏天、則度至于極。

夫天道三人道三。天有命、有禍、有福、人有醜、有紼、有斧鉞。以人之醜當天之命、以紼當天之福、以斧鉞當天之禍。六方三述、其極一也、不知則不存。

極命則民墮、民墮則曠命、曠命以誠其上、則殆於亂。極

民祿于善、于善違則不行。極禍則民畏、民畏則淫祭、淫祭罷家。極恥則民積、民積則傷人、傷人則不義。極賞則民賈其上、賈其上則無讓、無讓則不順。極罰則民多詐、多詐則不忠、不忠則無復。凡厥六者、政之所始。天故昭命以命力之曰、「大命世罰、小命命身」。福莫大於行、禍莫大於淫祭、恥莫大於傷人、賞莫大於讓、罰莫大於多詐。是故明王奉此六者、以牧萬民、民用不失。

撫之以惠、和之以均、斂之以哀、娛之以樂、訓之以禮、教之以藝、正之以政、動之以事、勸之以賞、畏之以罰、臨之以中、行之以權、權不法、中不忠、罰不從勞、事不震、政不成、藝不淫、禮有時、樂不伸、哀不至、均不一、惠必忍人。凡此物厥權之屬也。

惠而不忍人、人不勝□□不知死、均一不和、哀至則匱、樂伸則荒、禮□□則不貴、藝淫則害於才、政成則不長、事震則不功、以賞從勞、勞而不至、以□□服、服而不針、以中從忠、則賞、賞不必中、以權從法則不行、行不必法、法以知權、權以知微、微以知始、始以知終。

福則民祿、民祿則干善、干善則不行。極禍則民鬼、民鬼則淫祭、淫祭則罷家。極醜則民叛、民叛則傷人、傷人則不義。極賞則民賈其上、賈其上則民無讓、無讓則不順。極罰則民多詐、多詐則不忠、不忠則無報。凡此六者、政之始也。明王是故昭命以命之、曰「大命世罰、小命罰身」。福莫大於行義、禍莫大於淫祭。醜莫大於傷人、賞莫大於信義、讓莫大於賈上、罪莫大於貪詐。古之明王奉此六者以牧萬民、民用而不失。

撫之以惠、和之以均、斂之以哀、娛之以樂、慎之以禮、教之以藝、震之以政、動之以事、勸之以賞、畏之以罰、臨之以忠、行之以權。權不法、忠不忠、罰不服、賞不從勞、事不震、政不成、藝不淫、禮有時、樂不滿、哀不至、均不壹、惠不忍人。凡此、物權之屬也。

惠而不忍人、人不勝害、害不如死。均一則不和、哀至則匱、樂滿則荒、禮無時則不貴、藝淫則害于才、政成則不長、事震則寡功。以賞從勞、勞而不至、以法從中則賞、賞不必中、以權從法則行、行不必以知權。權以知微、微以知始、始以知終。

(4) 參考文獻

(雜誌)

·程浩「秋清華簡《說命》中対応今本「震」之字——兼

談《歸藏》·《筮法》的「震」卦卦名」(『出土文獻』第六輯、二〇一五年四月、中西書局)

·劉國忠「清華簡《命訓》初探」(『深圳大學學報』二〇

一五年第三期（五月）

・趙平安「釈清華簡《命訓》中的「耕」字」（『深圳大学学报』二〇一五年第三期（五月）（ネット））

・清華大学出土文献讀書会「清華簡第五冊整理報告補正」（清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年四月八日）

・華東師範大学中文系出土文献研究工作室「読《清華大学蔵戦国竹簡（伍）》書後（一）」（武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十二日）

・付強「卜辞「過」字統説」（武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十三日）

・蔡一峰「読清華伍《命訓》札記二則」（武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十四日）

・華東師範大学中文系出土文献研究工作室「読《清華大学蔵戦国竹簡（伍）》書後（三三）」（武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十七日）

・付強「読清華簡（五）劄記一則」（武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十七日）

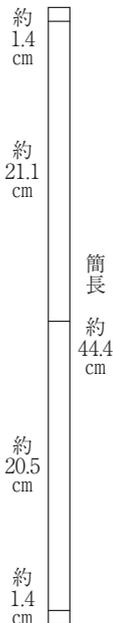
・单育辰「佔畢随録之十八」（武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月二十二日）

（中村未来）

『湯處於湯丘』（とうとうきゅうにおる）

（1）書誌情報

整理者は沈建華氏。竹簡は全十九簡。長さ約四十四・四cm、幅約〇・六cm。三道編。内容は整っており、第六簡上端部にやや欠損が見えるものの、文字の欠失はない。満写簡は二十七（三十五）字。



もともとの篇題や竹簡の順序を示す番号はなく、冒頭の五字（『湯處於湯丘』）を取って篇題とし、内容に基づいて竹簡の配列を定めている。本篇は『湯在啻門』（同じく清華簡第五分冊所収）と形制や字迹が一致しており、内容的にも関連が深く、同一人によって書写されたものと考えられる。

（2）整理者「説明」

『湯處於湯丘』は戦国期の作品に属す。本篇並びに『湯在啻門』の両篇は、いずれも伊尹に関する物語であ

り、その内容の一部は、『墨子』貴義篇・『呂氏春秋』本味篇・『史記』殷本紀などにも見える。『漢書』芸文志に記載される「伊尹書」は現在亡佚して伝わらないが、その佚篇である可能性も排除できない。

「九事の人を設く」という語は、馬王堆帛書『伊尹九主』と関連をもつようであり、また「敬天」・「尊君」・「利民」を強調する点は、戦国期の黄老刑名思想に近い内容をもつ。早期の黄老刑名学の発生を研究する上で、本篇は有用な資料となると思われる。

さらに、「食時は嗜饗むさぼらず」などの節制の主張は、『左伝』哀公元年の「昔の闔廬、食は味を二にせず」などと主旨が一致し、叙述形式も近似するなど、春秋戦国期の政治的風潮を反映するものと考えられる。君主は「自愛」（自ら愛しむ）というような政治上の語句にも、明らかに本篇が受けた影響を窺うことができる。

湯のもととの本拠地に関しては、これまで歴史学と考古学の方面から議論されてきた。本篇冒頭の「湯處於湯（唐）丘、取妻於有莘」は文献の記載を裏付けるもので、湯のもととの本拠地が晋南に淵源することに新たな証拠を提供することとなった。

(3) 補足・考察

まず本篇の物語構成について記しておくこととした。『湯處於湯丘』は大きく三つの場面から構成されている。

(第一場面) 湯と伊尹との出会いの場面

(第二場面) 湯が病中の伊尹を訪問する場面

(第三場面) 湯と伊尹との君臣問答(計四つ)

第一場面では、湯と伊尹の出会いの場面が描かれる。湯が有莘氏の女を妻に娶った際、その滕臣(世話役)として随行してきたのが伊尹であった。伊尹は料理を得意とし、その調和のとれた絶品料理を有莘氏が口にする、身体は安定し、感覚器官の働きは冴えわたるようになった。湯もこれを食べて絶賛し、「(この調和の法で)民を調和することも可能か」と質問。これに対して伊尹は「可能」と回答する。

第二場面は、伊尹のもとに通う湯と、それに対して苦言を呈する臣下の方惟ほういとの問答である。湯と伊尹は夏に對抗すべく謀議をかさねるが、それがまだ成就しないうちに伊尹が病にかかり、三ヶ月も外出不能となる。この間、湯は足繁く伊尹を訪ね、夜遅くまで謀議を繰り返す

た。臣下の方惟は、卑賤な伊尹のもとに君主みずから出向くまでもないとするが、湯は伊尹の着手した事業が確かな実績を上げており、これはそれを怠らざる継続していることの証であると反論。方惟もその言葉に納得する。第三場面は、湯の質問に伊尹が答える君臣問答で、同形式の問答が計四つ見える。以下にその要点を記す。

	湯の質問	伊尹の回答
①	夏の徳とは	財貨を貪り、刑罰に容赦がなく、民心は離反している。
②	夏に勝つ方策	天威を奉じ、祭祀を敬し、民を慈しむこと。
③	「自愛」の方法	奢侈を去り、民と利を分かたずすること。
④	君主と臣下の務め	(君主) 民を愛すこと。 (臣下) 君命を遵守すること。

次に、『湯處於湯丘』と諸文献との関連について考察を試みる。

第一場面と類似の説話を載せるのが、『呂氏春秋』本味篇である。伊尹の特異な出生を記す本味篇は、湯と伊尹の出会いを次のように記す。

空桑の中から発見された嬰兒の伊尹は、有旻氏（＝有

莘氏）の君に献上され、料理人のもとで養育される。成長した伊尹は賢者の誉れ高く、その評判を聞いた湯が伊尹を求め、伊尹も湯に仕えることを望む。しかし、有旻氏がそれを承諾しない。そこで湯は、有旻氏より妻を迎えることを申し出る。すると有旻氏はこれを喜び、伊尹もまた卑賤な媵臣役を買って出ること、両者はようやく出会いを果たす。

本味篇においても、湯が有莘氏から妻を娶ることで媵臣の伊尹と出会うという物語展開であり、この点は『湯處於湯丘』と共通する。加えて本味篇では、有莘氏との婚姻が伊尹の獲得を目的としていたことなども記しており、両者の出会いに至る経緯をより詳細に描いている。

次に、第二場面と酷似した話形をもつのが『墨子』貴義篇である。貴義篇において墨子は、たとえ賤人の言でも善言は採用すべきであると、湯と伊尹の次の故事を引用する。

湯は伊尹と面会するため車を走らせたが、御者の彭氏の子は、君主みずから卑賤な伊尹のもとへ出向く必要はなく、彼に会いたければ呼びつければよいとする。これに対して湯は、「お前などの知ることではない」と一喝し、伊尹は我が国の良医善薬であると反論。彭氏の子を車から降ろし、御者の任を解く。

基本的な物語展開は『湯處於湯丘』と一致していることから、両者は同系統の物語と見なすことができる。ただし、内容にはやや異なる点も存在する。『湯處於湯丘』の訪問は、不慮の病で伊尹が出仕不能となったことによるものであった。すでに両者の謀議は進行中であり、そのため湯は何度も出向いて事業の進捗状況を報告している。一方の貴義篇には、この訪問以前に湯と伊尹が謀議をかさねていたとするような記述はなく、伊尹と病氣との関連も看取されない。その訪問は、今後の国政について伊尹の助言を得るためと考えられ、両者の協議はこれからのことと思われる。あるいは今回の訪問は、伊尹に仕官を要請するためのものであったのかも知れない。『孟子』万章上篇には、湯が何度も使者を遣わし伊尹を招聘したとする説話が見える。万章上篇では明らかに仕官を促すための訪問となっているが、何度も伊尹のもとに通ったとする点では『湯處於湯丘』に通ずるところがある。(ただし、『孟子』では湯自身ではなく使者が伊尹のもとを往復)。

ここで想起されるのは、『史記』殷本紀の記載である。殷本紀は湯と伊尹との出会いに関して二説を併記する。一説は、伊尹が有莘氏の媵臣となり、料理によって湯に仕官を求めたとするもので、これは『湯處於湯丘』第一

場面、及び『呂氏春秋』本味篇と類似した内容をもつ。もう一説は、処士の伊尹を湯が何度も招聘したとする『孟子』万章上篇に見えるもので、湯の側から積極的な働きかけを行っている点では、『湯處於湯丘』第二場面や『墨子』貴義篇の系統に連なるものといえる。すなわち『湯處於湯丘』は、『史記』で併記される二系統の伝説を含みつつも、前者を湯と伊尹との出会いの場面、後者を病中の伊尹を訪問する場面とし、これらを一連の物語として描いているのである。以上の点は、『湯處於湯丘』にみえる伊尹伝説の特色として注目されよう。

第三場面で展開される湯・伊尹問答の内容は多岐にわたるが、伊尹は民心が夏から離反しているとした上で、民を慈しみ、民と利を分かち、民を愛すことの重要性を説いており、とりわけ民との関係を重視する点に特色が認められる。

なお、整理者は「敬天」・「尊君」・「利民」の主張に着目し、これを戦国期の黄老刑名思想に近い内容をもつと指摘する。ただし、以上のキーワードは黄老思想や刑名思想以外でも広く説かれるものであり、本篇との思想的な関連性を論ずる際には、より踏み込んだ検討が必要となろう。

伊尹に関する文献としては、すでに清華簡第一分冊所

収の『尹至』・『尹誥』、第三分冊所収の『赤牓之集湯之屋』があり、これに第五分冊所収の『湯處於湯丘』・『湯在奮門』を加えると計五篇となる。伊尹について実に多様な物語が存在していたことが知られるが、中でも『湯處於湯丘』第三場面に見える「湯或た小臣(伊尹)に問うに」・「小臣答うるに」といった問答形式は『湯在奮門』にも見えており、両篇には関連性が認められる。したがって『湯處於湯丘』の検討を進める際には、『湯在奮門』も視野に入れておく必要があるであろう。

(4) 参考文献

(雑誌)

- ・李守奎「漢代伊尹文献の分類与清華簡中伊尹諸篇の性質」(『深圳大学学报』二〇一五年第三期(五月))
 - ・鵬宇「《清華大学蔵戦国竹簡(伍)》文字訓釈三則」(『管子学刊』二〇一五年第二期(六月))
- (ネット)
- ・王寧「清華簡《湯丘》為《商丘》説」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年二月二二日)
 - ・王恩田「清華簡《湯丘》與《湯社》」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年三月五日)
 - ・清華大学出土文献読書会「清華簡第五冊整理報告補

正」(清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年四月八日)

- ・陳偉「読《清華竹簡(伍)》札記(三則)」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十一日)
- ・散宜凌「清華簡《湯處於湯丘》補説」(清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年四月十三日)
- ・曹方向「清華簡《湯處於湯丘》補論一則」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十三日)
- ・王寧「釈《清華簡(伍)》的《際》」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月十四日)
- ・王寧「読清華五《湯處於湯丘》散札」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月二二日)
- ・馬文増「清華簡《湯處於湯丘》新釈・注釈・析弁」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年五月十九日)
- ・王寧「清華簡湯与伊尹故事五篇の性質問題」(清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年六月一日)

(福田一也)

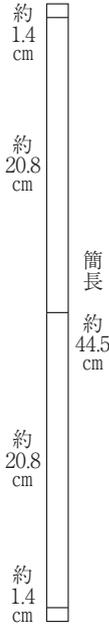
『湯在齋門』（とうていもん）にあり

(1) 書誌情報

整理者は李守奎氏。竹簡数は全二十一簡。簡長は概ね四十四・五cm、簡幅は〇・六cm、簡端は平斉、三道編。竹簡のうち二枚は竹簡の上端部が、また別の七枚は下端部が欠失しているが、文字の欠失はない。最終簡の第二十一簡は、中央下部から下端にかけて、竹簡全体のおよそ三分の一が留白となっている。満写簡は二十七〜三十一字。

写真を見る限り、竹簡の背面に順序を示す番号は記されていない。『湯在齋門』は、第一簡の字句からつけられた仮題である。

竹簡（完簡）の形状を图示すれば、次のようになる。



(2) 整理者「説明」

本篇は、伊尹に関する故事を記した古佚文献である。

湯王が小臣（伊尹）に先帝の良言を問ひ、小臣が成人・成邦・成地・成天の道を答えたことが記されており、比較的系統的に、当時の天人観が述べられている。

『史記』殷本紀には伊尹が「滋味を以て湯に説き、王道を致」した（以滋味説湯、致于王道）とあるが、本篇における湯王の問いに対する伊尹の答えは、五味の気から始まり、人や政を成すことと天道に従うことで終わっており、その主旨は『史記』の記述と符合する。

本篇全体は、五味の気と生命との関係について論ずることが特に詳細であり、青玉行気銘（天津市歴史博物館に所蔵されている十二面体の小玉柱の銘を指す。原拓は羅振玉『三代吉金文存』第二〇卷四十九頁に収録）の類の気功養生説と密接な関係がある。本篇には、十ヶ月で人が成長する過程について述べた部分があるが、『管子』水地篇・『文子』九守篇・『淮南子』精神篇などに見られる十ヶ月で人が成長する過程とは、内容や表現にかなり異なるところがある。

本篇においては、人の生老病死に関する気の議論が述べられている他に、政治は簡明で刑罰が軽く、成果を挙げなければならないとする議論や、さまざまな神について述べる天地についての議論が見られ、思想内容としては雑然としている。古代の文献の中には、「伊尹が湯王の

問いに答える」ものが数多く引用されており、『漢書』「芸文志」では、道家の冒頭に『伊尹』五十一篇が収録されている。また小説家にも『伊尹説』二十七篇が収録され、その班固の注に「其の語淺薄にして、依託に似る」とある。本篇において氣と生命との関係について論ずる部分は、道家の行氣養生の説と関係があると思われる。

既に公開された清華簡の中には、湯王と小臣とについて記述するものが五篇ある。その中の『尹至』・『尹誥』（ともに第一分冊）は、字句が難解で、概ね典型的な『尚書』類の文献である。また『湯處於湯丘』（第五分冊）と『赤谿之集湯之屋』（第三分冊）とは、字句が明白で、故事性が比較的強い。『湯在啻門』は内容が豊富で、表現が細かく、思想内容は雑駁であるけれども、道を行って成功することを中心としている。清華簡に見られる数多くの伊尹の言動からは、戦国時代において伊尹の故事が盛んに説かれた状況を窺うことができる。

本篇中、小臣の回答の発言は、韻を踏むものが多い。本篇は湯王と伊尹とに仮託して、戦国時代に成立したものであるろう。

(3) 補足・考察

先ず書誌情報に関して補足すると、清華簡の中の湯王

と伊尹との問答について記述する五篇のうち、『尹至』・『尹誥』・『赤谿之集湯之屋』の三篇は、簡長約四十五cm、三道編、簡端は平斉で、いずれも篇題があり、また竹簡の背面に連続する劃痕が認められる。『湯處於湯丘』・『湯在啻門』の二篇は、簡長約四十四・五cm、三道編、簡端は平斉であるが、篇題・劃痕は認められない。

本篇の内容について少し詳しく見ていくならば、本篇における殷の湯王と「小臣」（伊尹を指す）との問答は、「正月己亥」に「啻門」において行われており、「古之先帝」の「良言」が今に伝わっているかどうかを尋ねる湯王の質問から始まる。この湯王の第一の質問に対して伊尹は、「古之先帝」の「良言」は伝わっており、そうでなければ後世の王者は「成人」（人を整え、成就させる）・「成邦」（邦を整える）・「成地」（地を整える）・「成天」（天を整える）ということを行うことができないと、第一の回答をする。

次いで湯王は、伊尹の回答に登場した「成人・成邦・成地・成天」について、それぞれの内容を尋ねる第二の質問をする。これに対して伊尹は、五つのものが人を整え、徳が人を大きくし、また四つのものが邦を整え、五つのものが邦を助け、更に九つのものが地を整え、五つのものが地を助け、九つのものが天を整え、六つのもの

が天を運行させると、第二の回答をする。

続いて湯王は、人は何を不得て生ずるのか、何が多くなつて成長するのか、何を減少させて老いるのか、どうして同じく人でありながら或るものは悪く、或るものは好いといった差があるのか、と第三の質問を行う。この第三の質問は、伊尹の第一・第二の回答の中に登場する「成人」について特に焦点を当てた問いと理解すべきと考えられる。これに対して伊尹は、それは「五味の氣」の働きのよるのであり、五味の氣が人をつくるのであり、特にその氣の中でも精微な氣のことを「玉種」というと述べた上で、胎児が十ヶ月で成長する過程を月ごとと段階を追つて説明する。そして、氣が不足することなく機能すれば長寿になり、氣が奮い立つて盛んになれば、その身体は活発に活動すること、氣は性交によって身体にあまねく行き渡り、力が生じることを述べる。また、氣が不足すると老い、氣の活動がゆるやかになると身体の活動が止まり、活動が損なわれて疾病が生じること、更に氣が尽きてしまうと身体は活動しなくなり、意欲がなくなると、第三の回答をする。

次いで湯王は、伊尹の第二の回答中に述べられていた「四つのもが邦を整え、五つのもが邦を助ける」との内容を尋ねる、第四の質問をする。これに対して伊

尹は、四つのもとは四神のことで、四正ともいうこと、五つのもが邦を助けるとは、徳・事・役・政・刑のことであり、第四の回答をする。

続いて湯王は、伊尹の第四の回答中に登場した「徳・事・役・政・刑」の五つのもについて、それぞれの美であるものと悪であるものを探ねる、第五の質問をする。これに対して伊尹は、「徳・事・役・政・刑」それぞれの美なるものと悪なるものについて、統治のあり方に即しつづ説明を加える第五の回答をする。

次いで湯王は、伊尹の第二の回答中に述べられていた「九つのもが地を整え、五つのもが地を助ける」との内容を尋ねる、第六の質問をする。これに対して伊尹は、九つのもは九神のことであり、地真とも呼ぶこと、五つのもは水・火・金・木・土の五行であり、それらが地を助けるとは、五行が五つの方向を構成し、五つの穀物を育てることである、と第六の回答をする。

続けて湯王は、やはり伊尹の第二の回答中に述べられていた「九つのもが天を整え、六つのもが天を運行させる」との内容を尋ねる、第七の質問をする。これに対して伊尹は、九つのもは九神のことであり、九宏とも呼ぶこと、六つのもは昼・夜・春・夏・秋・冬であり、それらが天を運行させるとは、その昼夜と四時と

が怠ることなく運行することであり、それこそがすべての事象の発端で、天道の働きであると、第七の回答をする。

この後湯王は、伊尹に向けて、古の先帝の良言をどうして改めようか、改めることはないと言へ、謹んで従うことを宣言したところで文献は終わっている。

湯王と伊尹との発言の内容は概ねよく対応しており、全体として整った構成であるように見受けられる。なお、二人が問答を繰り返したとされている「正月己亥」が何年か、また問答が行われた「畜門」がどこを指すのかは不明である。

こうした内容の『湯在畜門』の性格について、整理者の李守奎氏は論考「漢代伊尹文献の分類与清華簡中の伊尹」において、漢代の学者は伊尹に関連する文献を『尚書』類・道家・小説家に分類したが、伊尹の登場する清華簡の五篇についても三つに分類することができる。すなわち、『尹誥』・『尹至』はともに戦国中期に既に流布していた『尚書』類文献であり、中でも『尹誥』は班固のいう五十七篇『古文書経』の一つで、真古文『尚書』であるとする。そして『赤谿之集湯之屋』は「其語淺薄」な小説家の言であり、また『湯處於湯丘』と『湯在畜門』とは、竹簡の形制が同じく、同筆で、共

に湯王と伊尹との故事を記し、言葉が分かりやすく、内容が雑駁で、『尹誥』・『尹至』とは明らかに性格が異なり、仮託された文献であるとされる。

『湯在畜門』の性格の問題は、清華簡において湯王と伊尹との問答を記す五篇が、竹簡の背面に篇題と連続する劃痕とが認められる『尹至』・『尹誥』・『赤谿之集湯之屋』の三篇と、篇題と連続する劃痕とが認められない『湯處於湯丘』・『湯在畜門』の二篇とに区分されることも関連すると思われる。ちなみに、本年九月七日に清華大学で李守奎氏と面談した際、清華簡には五篇の他にも、湯王と伊尹との問答を記述する文献があるかと尋ねたところ、無いとの回答を得た。

また王寧氏は「清華簡湯与伊尹故事五篇的性質問題」において、湯王と伊尹との問答を記述する五篇は、いずれも先秦時代の『尚書』に含まれていた篇であるとし、『赤谿之集湯之屋』は『女鳩女房』(『書序』では『女鳩』・『女房』)、『湯在畜門』は『書序』や『殷本紀』のいう「帝誥」、『湯處於湯丘』は「釐沃」であるとされる。王寧氏の見解は、『書序』の記述に五篇をあてはめようとするもので、憶測の域を出ないと思われる。

なお、馬文増氏は「清華簡《湯在帝門》新釈・簡注・白話釈文」において、『湯在畜門』はもともと殷の時代

に成立した文書が楚文字に転写されたものであり、伊尹自らの作で、戦国時代に偽託されて成立したものではないとする。但し、その根拠については一切述べられておらず、成立しがたいと思われる。

(4) 参考文献

(雑誌)

・李守奎「漢代伊尹文献の分類与清華簡中の伊尹」(『深圳大学学报』二〇一五年第三期(五月))

(ネット)

・清華大学出土文献読書会「清華簡第五冊整理報告補正」(清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年四月六日)

・程燕「清華五劄記」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十日)

・陳偉「読《清華竹簡(伍)》札記(続)」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十二日)

・陳劍「《清華簡(伍)》与旧説互証兩則」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月十五日)

・華東師範大学中文系出土文献研究工作室「読《清華大学藏战国竹簡(伍)》書後(三)」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十七日)

・王寧「积清華簡五《湯在啻門》的『孕』」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年四月十八日)

・王寧「积清華簡五《湯在啻門》的『渝』」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月二十三日)

・王寧「読《湯在啻門》散札」(復旦大学出土文献与古文字研究中心、二〇一五年五月六日)

・馬文增「清華簡《湯在帝門》新釈・簡注・白話釈文」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年五月二十七日)

・王寧「清華簡湯与伊尹故事五篇的性質問題」(清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一五年六月一日)

・馬文增「拋《清華簡》看關於伊尹的訛伝与誤解」(武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年六月四日)

(竹田健二)

『殷高宗問於三壽』(いんこうそうさんじゆにとう)

(1) 書誌情報

整理者は李均明氏。竹簡は全二十八簡。但し、第三簡を欠き、現存二十七簡。その内、第二十五簡の上半分が欠失し、また、第八簡の上下端、第九簡下端がやや残欠している。完整簡は長さ約四十五cm。幅〇・六〇・七

cm。三道編。満写簡は二十八〜三十四字。竹簡（完簡）の形状を図示すれば、次のようになる。



竹簡背面に「一」〜「廿八」の順次を示す番号があるが、「三」を欠く。番号に乱れがあり、「十五」は第十簡の位置にあるべきで、「十」は第十五簡の位置にあるべきである。原釈文はすでに入れ替えて記載している。

篇題「殷高宗問於三壽」は末簡（第二十八簡）背面上部に記載されている。

（2）整理者「説明」

内容は、殷の高宗武丁と三寿（三人の長老、主として彭祖）との対話に仮託し、作者の思想を述べたもので、全体は二部に分かれる。

前半は、「長」「険」「厭」「悪」の四つの観念を提出し、具体的な事物との因果関係を説き、末尾で、殷の乱世に対する自警を述べる。また後半は、国家の統治や個人の修養に関わる「祥」「義」「徳」「音」「仁」「聖」「知」「利」「信」という九つの観念を提出してそれぞれの具体

的内容を説き、末尾で、王朝交代に際する彭祖の感嘆や、民の「揚」「晦」といった性格と統治についての問答を記す。

儒家思想を中心としているが、他学派の思想も取り入れている。戦国時代中期の特色を備えている。それは、後の荀子の思想に類似する点があり、戦国思想史研究の貴重な資料である。

（3）補足・考察

まず、書誌情報に関する補足として、符号の問題がある。墨釘は概ね句読点として打たれているようであるが、必ずしも全体を通して一貫している訳ではない。また、句読点ではなく、語の区切りに付されている箇所も若干見られる。従って、この墨釘を唯一の手がかりとして読解を進めて行くことは危険である。また、整理者は指摘していないが、最終簡（第二十八簡）末尾に墨鉤が見え、ここで本篇が終結していることを示している。

次に内容についての考察を記す。本文献は、「洹水ほんすいの上ほとり」で高宗と三寿が対話するという設定になっているが、整理者の説く通り、大きくは前半部と後半部に別けて考えることができる。前半部について指摘できるのは、次のような点である。

①高宗は、『史記』殷本紀によれば、殷の第二十二代王武丁である。賢人傅説を任用し、殷の中興を果たしたことで知られる。第十九代王盤庚の時、殷墟に遷都したとされているので、その地を流れる「洹水」の「上」での対話というのは、自然な場面設定である。なお、殷代の資料では、「武丁」「帝丁」と記され、「高宗」は周代以降の呼称である。このことは、本文献の成立が周代である可能性を示唆している。

②高宗の三寿に対する質問は、国家の保全に関わる「長」「陰」「厭」「悪」の四点である。以下、高宗と三寿の問答の要点を表にまとめると次のようになる（少寿の発言は竹簡残欠のため確認できない）。

悪	厭	陰	長		少寿
					中寿
喪	臧(蔵)	心	風		彭祖
傾	平	鬼	水		高宗
無飢	富	矛及干	「山」		

③一度目の彭祖の言に対して、高宗は「吾聞く」として自説を述べるが、その後、「書占を読」むことの大切さを説く彭祖の見解を聞いて「恐懼」する。この「書占」が整理者の指摘する通り術数類の書であるとすれば、天命に対する留意を説いていることになり、それを逸脱すると人事にも異変が起ると警告していると推測される。広義の天人相関思想を説くものである。

④彭祖は地の文では「彭祖」と記述されるが、高宗からの呼びかけでは「高文成祖」と称されており、高宗から尊敬される立場の古老として描かれていることが分かる。また、道家・道教系文献では、八百歳を生きた神仙的存在とされるが、ここでは、特にそうした性格は見いだせない。但し、高宗の問いの中の一つに「長」があり、また、高宗が「我尔なんじと相念おもい相謀はかり、世世後嗣に至らん」と言っていることから、彭祖が国家の興亡・継承について高い見識を持つ長老だという前提で記述されていることが分かる。上博楚簡『彭祖』（第三分冊所収）、馬王堆漢墓竹簡『十問』とともに、彭祖伝承の展開を考える上でも、きわめて重要な資料である。この三つの文献における彭祖の形象の相違は次の表の通りである。

文献名	彭祖の形象
清華簡『殷高宗問於三壽』	殷の高宗と問答する「三寿」の一人。国家の歴史・興亡に精通した古老として描かれている。天人相関に留意して、王の政治の重要性を説く。
上博楚簡『彭祖』	「君」として登場し、「臣」である考老と君臣問答を交わす。主題は、天地の道や人倫、国家の永続。(個人の長生ではない。)
馬王堆漢墓竹簡『十問』	十の問答によって構成された内の六番目で、王子巧父(王子喬、周太子晋)の問いに答え、人間の精気や長生に言及する。『十問』全体の主題も「長生」であり、房中養生的性格を備えている。

一方、後半部については、次のような点を指摘できる。

① 彭祖に対する高宗の二度目の問いは、「先王の遺訓」について。具体的には、「祥」「義」「徳」「音」「仁」「聖」「知」「利」「信」とは何かというもの。ここでも彭祖は、「先王の遺訓」を知っている古老として描かれている。

② 以下、九つの内容について概要を記すと、「祥」は天の常道を知り、天神の明を敬うというもので、天に対する強い敬意をうかがうことができる。「義」は礼と教化によって民を正すこととされる。「徳」は、「中」に従い極端なことをしないこと。また、適宜赦免を実施し、善を振興することによって、民の力を集めることとされる。さらに、神の福をいただくこともその要素の一つと

される。「音」は人材の登用と音楽による民の教化を説く。「仁」は衣服を正して信を好み、孝行慈愛の心を持つて隣人を愛し、遠くの人々にも思いを致すこととされる。また、神を喜ぶことも、その要素の一つとされる。「聖」は神を敬い民を調和させて戦争をとどめ、賢人を登用して讒言・謠言が退けられるような状況を行う。「智」の特徴は、諫めを納れて(自分に対する)誇りを受け入れ、神や民を責めることがないという点。「利」は上下左右に乱れがなく、嫉妬や怨嗟が起こることがない状況。必ずしも金銭的利益を言うのではない。「信」は「叡信の行」と言い換えられるが、民を養って王位を守り、四方に教化を行き渡らせることを言う。

③ 以上九点の内容から、その遺訓の対象者は、神と民

の間にいる存在、すなわち「王」であることが分かる。なお、こうした九つの配列・組み合わせは、伝世儒家文獻には見られない。

④前半で四つの観念について問答し、後半で九つの観念について問答しているが、こうした問答のスタイルは、同じく清華簡(五)所収の『湯在甯門』に類似している。『湯在甯門』は、湯王が小臣に対して「成人」「成邦」「成地」「成天」などテーマをあげて次々と質問し、小臣がそれに答えていくという構成。但し、『湯在甯門』では、湯王と小臣の問答のみが七回続いて行われている、他の人物は登場しない。

⑤後半部の彭祖の言では、夏から商(殷)への王朝交代の際、安易に軍事を發動したことが反省されており、それを戒めとして政治をとることが肝要とされる。なお、「桀」については、伝世文獻に記されるような「暴君」としてのイメージは付与されていない。むしろ殷の側への訓告となっている点に特徴がある。

⑥また、それに続く高宗の質問では、治めがたい民の性質を「揚」と「晦」の語で表すが、彭祖は、それについて説明しながらも、その本性については一定の信頼感を示し、教化していくことの重要性を説く。またその際にも、施策を誤れば天罰が下り、善政を敷けば天が報い

てくれると述べる。全体的に、強い天人相関の思想が表れている。高宗の質問の一番目が「祥」であることも、それに関連している。但し、戦国時代の陰陽家の説く陰陽五行説や、公羊学の説く災異説、黄老思想の説く周期的天道観といったものではなく、どちらかと言えば、素朴な天人相関思想である。なお、殷代の信仰対象であった「帝」(上帝)は登場しない。このことも、本文獻の成立時期について一つの手がかりを与える。

⑦本文獻における彭祖の言を、どのように評価するかという点については、整理者の李均明氏は、荀子との類似点を指摘し、成立時期としては戦国中期を想定する。確かにそのようにも推測されるが、ここで最も重視すべきなのは、やはり、その基調をなす天人相関の思想であろう。この点は、「天人の分」を説く荀子の思想とはむしろ対照的である。高宗・彭祖に仮託したこうした教訓が比較的古くから伝わっていた可能性は充分に考えられる。そして、こうした文獻は、周王朝にとっても、また戦国諸国にとっても、政治の教訓書として捉えられている可能性がある。

⑧なお、馬文増氏は、本篇はもともと二つの原篇(冒頭から第十簡の「不友」までと、「殷邦之妖祥並起」から文末まで)からなり、楚の史官が抄写する際に両篇を

合わせて一篇としたものであり、作者は殷代の史官で、実録だとする。しかしながら、「高宗」や「成湯」といった呼称、天人相関思想の特色、使用されている思想用語の時代性などからも、殷の史官の「実録」だとするのは、極端な見解かと思われる。本文献については、周代において殷王朝の歴史を反省し、治世の教訓にしようとした意図で著作されたもの、という可能性を指摘しておくのが妥当であろう。

(4) 参考文献

(雑誌)

- ・李均明「清華簡《殷高宗問于三寿》概述」(『文物』二〇一四年第十二期)
- ・馬楠「清華簡第五冊補積六則」(『出土文獻』第六輯、二〇一五年四月、中西書局)
- ・李均明「清華簡《三壽》音說解析」(『出土文獻』第六輯、二〇一五年四月、中西書局)
- ・李均明「清華簡《殷高宗問于三寿》の利說解析—与荀子義利觀の比較」(『出土文獻与中国古代文明學術研討會論文集』、二〇一五年六月、中国人民大学)
- ・鵬宇「《清華大學藏戰國竹簡(伍)》文字訓釈三則」(『管子學刊』二〇一五年第二期(六月))

(ネット)

- ・清華大學出土文獻讀書會「清華簡第五冊整理報告補正」(清華大學出土文獻研究與保護中心、二〇一五年四月八日)
- ・鵬宇「《清華大學藏戰國竹簡(伍)》零識」(清華大學出土文獻研究與保護中心、二〇一五年四月十日)
- ・楊鵬樺「清華簡《殷高宗問於三寿》の若小人之聾盲試解」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十一日)
- ・陳偉「讀《清華竹簡(伍)》札記(續)」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十二日)
- ・王挺斌「讀清華簡(伍)《殷高宗問於三寿》小札」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十三日)
- ・陳健「也說《清華五·殷高宗問於三寿》的「寵皇」」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年四月十四日)
- ・胡敕瑞「《殷高宗問於三寿》札記一則」(清華大學出土文獻研究與保護中心、二〇一五年四月十六日)
- ・補白「清華簡《殷高宗問於三寿》臆說四則」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇一五年四月十六日)
- ・王寧「讀《殷高宗問於三寿》散札」(復旦大學出土文

献与古文字研究中心、二〇一五年五月十七日)

・曹峰「読《殷高宗問於三寿》上半篇一些心得」(清華大學出土文獻研究与保護中心、二〇一五年五月二十五日)

・馬文增「清華簡《殷高宗問于三寿》新釈・簡注・白話訳文」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一五年五月三十日)

(湯淺邦弘)